

解題

葛原詩話標記

一卷

猪飼彦博著

猪飼彦博、字は希文、敬所と號す、通稱は太郎右衛門、近江の人、巖垣龍溪の門人なり、人と爲り謹懲にして、記性に富めり、凡そ書を讀むに、一たび目に觸るれば終身忘れず、經史の外、博く群書に涉れり、大和の谷三山の質問數十條に答へたるが如き、以てその博識の一端を見るに足る、最も經書に明かに、特に三禮に精通せり、讀禮肆考の著あり、世に行はる、又、大田錦城の九經談を批評し、賴山陽と南北朝の正統を論ずるが如きは人の熟知する所なり、晩年に津藩に聘せられて優遇を受けたり、其の兩目を失ふに及び、尙ほ藩侯に侍して經義を講じたり、弘化二年十一月十日歿す、年八十五。此書原本は余の家藏にして、葛原詩話の欄外に敬所翁が自筆にて記せり、今之を鈔出して一卷とし、假りに標記と名づけたり、敬所翁、四書標記の著あるに因む、僅々十四條に過ぎずと雖、希觀の書なれ

ば、茲に掲ぐることとせり、原本には松蘿館の印を押せり、(模刻して目録の背に載す)、松蘿館は巖垣氏の號にして、龍溪は葛原詩話に序を載せたり。

葛原詩話標記目錄

卷一

載筆一

雲兜一

御所仙洞二

冰雪容二

倒用文字二

覆杯有二義三

卷二

惱公負公三

開爐三

唐花唐子三

坪四

卷三

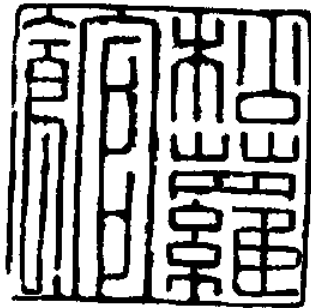
吾妻鏡跋四

卷四

番四

總評四

目錄終



葛原詩話標記

近江 猪飼彦博希文著

卷一

載筆

唐書杜正倫ガ傳ニ云、臣職當修起居注、不敢不盡愚直、下當時褚遂良ガ本語モ、亦應ニ然ルベシ、貞觀政要ニ修飾シテ當載筆トセルナラン、載筆ハ只史ヲ謂フ、曲禮ニ原ク、コレ兄弟ヲ友于、日月ヲ居諸ト稱スルノ類ノミ、通鑑ノ胡注ニ、賞主也、云云トイヘルハ、誤ナリ。

以國字譯漢語

國語ヲ以テ經史ヲ譯スルコト元魏ニ始ル。

雲兜

五山堂詩話云、燕用雲兜、按王謝抵烏衣國歸、王命取雙飛雲軒至、乃烏氈兜子、事見據

遺原非辭典、二師失之目睫。

御所 仙洞

余竊ニ意フ、中世、天子、皇宮ニ常ニ在サズ、或ハ感神院、閑院ナドノ離宮ニ在シ玉フ、故ニ其所ヲサシテ御所ト云フ、後世凡ソ尊貴ノ居ヲ通ジテ御所ト云ハ誤ナリ、宋景濂、上皇ノ宮ヲサシテ仙洞ト云、猶其ノ義ヲ誤ラズ、六如、今世ノ俗ニ從テ、上皇ヲ奉稱スルト云ハ、疎ナルニ似タリ。

冰雪容

莊子肌膚若冰雪ハ、宋玉好色賦ニ、肌如白雪ト云ヘ、ルト同ジ、世人ノ解誤ラズ、爾雅ヲ引テ、惑フコトナカレ、爾雅ノ此條、本文、及ビ注疏皆誤衍アリ、余別ニコレヲ論ズルコト詳ナリ。

倒用文字

錯莫莫錯落拓拓落ハ、啞啞啞啞啞啞啞、ト同ジ、イヅレヲ正、イヅレヲ倒トスベカラズ、馳志向伊吾ハ、後漢書臧宮馬武、馳志于伊吾之北ノ故事ヲ用ユレバ、伊吾ハ西域ノ地名ニテ、讀書ノ吾伊ヲ倒スルニアラズ、詩ノ東山ニ、制彼裳衣ノ句アレバ、裳

衣必シモ倒ト云ベカラズ。

覆杯有二義

覆讀入聲者、傾覆也、讀去聲者、蓋覆也、杜陳詩、皆盡飲之義、唯陳造覆觴、用晉書文字、不飲之義、以是觀之、覆杯、盡飲也、覆觴、戒飲也、仇注恐未盡。

卷二

惱公

負公

史記留侯世家ニ、豎儒幾敗而公事、又、豎子固不足遣、而公自行耳トアリ、高祖自謂テ而公トス、漢書ニ、乃公ニ作ル、我身ヲサシテ公ト云ハ、コレニ本ケリ、晉ノ陶侃ガ自ラ老子ト稱スルガゴトシ、不恭ノ詞ナリ。

開爐

西土ノ人、十月朔ニ爐ヲ開クハ、吾邦ノ俗、十月亥日ニ地爐ヲ開クガ如シ、茶人ノ爐開トハ、状態異ナリ。

唐花

唐子

唐訓空ノ義、又法句譬喻經ニ、唐苦敗身本、唐自勞動、殞命山中ナド、アリ、唐ハ徒ナ

リ、唐花ノ解ニハ與ラザルニ似タリ。

坪

爾雅釋地云、大野曰平、說文作坪、云、地平也、娑羅坪ハ、卽三卷ニ云、青柯平種藥平ノ類ナリ、坪ト平ト別ニ出スモノハ粗ナリ、吾邦ノ所謂坪ハ、唐土ノ歩ナリ。

卷三

吾妻鏡跋

竹枝詞、大関、作「大関」。

卷四

番

番、字書云、遞也、漢書武帝紀、賢良宿直更番、邦俗ノ云代リ番ナリ、今ハ第一番、第二番トテ、物ノ甲乙先後ヲ次第シ、或ハ申樂カケガクノ詔ヲ百番、二百番ト云ヒ、碁將棋ノ一局二局ヲ一番二番ト云ヒ、又守衛ヲ番スルト云、皆本義ヲ失フ。

總評

五山堂詩話云、詩用生字者、六如之辯也、蓋渠一生讀詩、如關燈市、覓奇物、故其所著詩

話只算一部骨董簿，殊失詩話之體也。

葛原詩話標記終

大正九年八月二十日印刷
大正九年八月廿三日發行

日本詩話叢書 第四卷

非賣品

編輯者

池田四郎次郎

發行者

東京市神田區表神保町二番地
立田義元

印刷者

東京市京橋區弓町二十五番地
高橋郁

印刷所

東京市京橋區弓町二十五番地
三協印刷株式會社

發行所

東京市神田區
表神保町二番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
接替東京三五一三番